

## 死への憧憬と諦観

— Henry James の小説に見る死生観 —

加藤 くに子

Henry James (1843-1916) は作品の中で、重要な登場人物達の様々な「死」を描いている。その数は非常に多く、彼の作品から「死」の場面を抜き取ると、彼独特の色彩が消えてしまうかという危惧さえ生まれそうである。その点について Stephen Spender は “... whom it is impossible to regard except in the light of death. The preoccupation with death is so emphatic that it is difficult to remember that, as an exception, Maggie Verver did not die, at the end of *The Golden Bowl*.”<sup>1)</sup> とその「死」の場面の多さを強調し、James の作品における「死」の取り扱いの意味を次のように分析する。

The death theme in Henry James's work has a significance which extends far beyond that of the 'International Situation.' In the first place ... it probably has a bearing on his own psychology. Secondly, it is part of a tradition derived from Hawthorne, and extending far beyond James into a great mass of modern imaginative literature.<sup>2)</sup>

本稿では Spender の指摘する第一の点に焦点をあてて、「死」の描き方を軸として、James の作品に特有の死生観を探究してみたい。まず、彼の描く「死」の共通点を探し出すために、短編小説に登場する人物の「死」の取り扱いを見る。次に、それが短編小説だけのものか、中・長編小説にも当てはまるものかを確認する。さらに、その共通点の意味するものを探り、そのう

えで、それがよって立つもの、すなわち、作家自身の生い立ち、性格を検討し、作品に表れる死生観がいかなる意味を持つものかについて探求する。

## I

James 作品の死生観は 100 編を越える短編小説に顕著に表れていると思われる。まずその中から年代順に数編を選び、それぞれの「死」の描写を具体的にみていくことにする。

“*Passionate Pilgrim*” (1871) の主人公は、病弱のアメリカ人 Clement Searle で、長いこと憧れてきたヨーロッパに来て、その素晴らしさに感動し、イギリス定住を希望するが、夢敗れてロンドンで息絶える。健康でありさえしたら、夢にまで見た女性と結婚し、伝統の息づく屋敷も手に入ったはずが、病弱であったために、全てを失ってしまう。作品の冒頭、語り手との会話の中に物語の不幸な方向性が暗示されていると思う。

“Before you lost your health,” I suggested.

“Before I lost my health,” he answered. “And my property—the little I had. And my ambition. And any power to take myself seriously.”<sup>3)</sup>

このように、話の進展を待たずに、既に死への序曲は始まっている。そして Clement Searle の死の描写には、“In a moment more death had come”<sup>4)</sup>とあるように、高齢者の死ではないのに、静かに枯木が朽ちていくがごとく描かれ、そこには苦しみ悶える様子は全く無い。

“*The Author of Beltraffio*” (1884) では、*Beltraffio* という作品に心酔する主人公が、念願のその作者に会い、その家族の崩壊を語るという形式になっている。登場人物は、語り手である青年と *Beltraffio* の作者である Mark Ambient, その妻と幼い息子、それにたまたま作者の家庭に訪れていた Mark の妹の五人に過ぎない。しかし、Mark の息子、妻、Mark と次々に亡

くなり、そこに居あわせた Mark の妹も作品の終りでは修道院に入ってしまう。いわば芸術家の家庭の崩壊と死という悲劇を取り扱う作品であるが、それぞれの死については苦しみも、生への執着も表現されず、非常な静けさのうちに語られる。

自由奔放な作風を持つ Mark に対して、彼を理解できぬ道徳家の妻は、夫の作品が美し過ぎる息子を墮落させると信じて疑わない。その意識がこうじて、夫から息子を守るために病がひどいのにも拘わらず、息子に薬も与えず、腕の中で死なせてしまう。夫はその妻のことを青年に “There’s hatred of art, there’s a hatred of literature”<sup>5)</sup>と語り、Mark の妹は “She sacrificed him . . . The book gave her a horror; she determined to rescue him to prevent him from ever being touched.”<sup>6)</sup>と説明する。語り手はその息子に会った時既に “I grasped the truth of his being too fair to live”<sup>7)</sup>と彼の不吉な運命を予言する。息子の死のみならず、Mark の妻の死について語り手は、 “she failed rapidly after losing her son, sank into a consumption and faded away at Mentone”<sup>8)</sup>と語るのみで、Mark の死に至っては、 “They lasted five years—till his death—and were full of interest, of satisfaction and, I may add, of sadness.”<sup>9)</sup>とあるに過ぎない。一つの家庭が崩壊するという重大な問題が、これほどまでに静かに進行するものなのだろうか。余りに淡々と語られるそれぞれの死は、現実からはかけ離れたもののように思われるのだ。

“Brooksmith” (1891) は、外交官を引退した病弱の Mr. Oliver Offord の屋敷に雇われている執事 Brooksmith の凋落を描く。彼は博識な雇主を手伝って誰にも喜ばれる伝統的な英国のサロンを作りだした。しかし、雇主が死ぬと、Brooksmith は俗人のために働くことに耐えられず次第に凋落の道を辿り、ついには行方をくらます。Henry James の審美眼の何たるかを如実に表した佳作である。まず Mr. Offord に関しては、 “What had become of it however when Mr. Offord passed away like any inferior person”<sup>10)</sup>とその死

を語り、Brooksmithの死は、次のように極めて詩的な表現で示される。もちろん死の苦しみや辛さの具体的な描写はない。

No trace of him had come to light . . . This news was a sharp shock to me, for I had my ideas about his real destination. His aged relative had promptly, as she said, guessed the worst. Somehow and somewhere he had got out of the way altogether, and now I trust that, with characteristic deliberation, he is changing the plates of the immortal gods.<sup>11)</sup>

次に“The Beast in the Jungle”(1903)では、John MarcherがMay Bartramの助けをかりて、自分に起こるだろう何事かを長年待ち続けるが、ジャングルに潜んでいる野獣はなかなか現れず、彼女の死後にやっと、それは既に起こってしまったことが判る。すなわち、自分にはもう何も起こらない、自分は人生を浪費したに過ぎないという悔恨の作品だと言えよう。これは現実経験への恐怖を示すJamesの感性そのものといった感じで、ジャングルに吹きすさぶ空しい風音や、墓地で深い苦悩にうちひしがれた人を見かけた時のMarcherの驚愕が、ずしりと胸に響く。

Bartramの最後の状況と会話は次のように示される。

“I would like for you still—if I could.” Her eyes closed for a little, as if, withdrawn into herself, she were for a last time trying. “But I can’t!” she said as she raised them again to take leave of him.<sup>12)</sup>

このように美しい別れの場面ではあっても、ここに死の苦しみの記述は無い。しかし、Jamesの卓越した表現技術はMarcherの人生の空しさを見事に伝えている。

. . . he had emptied the cup to the less; he had been the man of his time, the man, to whom nothing on earth was to have happened. . . It was the truth, vivid and monstrous, that all the while he had waited the wait was itself his portion.<sup>13)</sup>

“The Bench of Desolation” (1910) の主人公 Herbert Dodd は、Kate Cookham に婚約不履行で訴訟を起こすと脅かされ、270 ポンドを支払わされる。その返済の過程で Dodd の生活は貧窮に陥り、ついには妻と二人の娘を失うことになる。その後、成熟した Kate から、支払った5倍の金額が Dodd に返され、Kate との新しい人生の道が開かれるという、現実離れた作品である。ここでは Dodd の妻と二人の娘が死ぬが、その描写ははなはだ心もとない。すなわち、“during the most dismal years, the three of the loss of their two children, the long stretch of sordid embarrassment ending in her death”<sup>14)</sup> と語られる三人の死には、貧困にあえいで死んでいく悲惨な様子は見られないのである。

Henry James の短編小説に登場する人物達の「死」の描写から、共通する点がいくつか浮上してくる。つまり、死は具体的に描写されないこと、仮に描かれても死は辛く醜いものではなく、美しい救いの道であるということ、そして死は全ての終りではなく、後に残った人々に精神的遺産を残す、という点である。

長編小説の *Roderic Hudson* (1876) は、主人公である才能豊かなアメリカの青年彫刻家 Roderic が、修行のために渡ったローマで、社交界の華に溺れ破滅するというものである。*The Portrait of a Lady* (1881) は、アメリカ版の教養小説と考えられているもので、主人公のアメリカ娘 Isabel Archer の精神的苦難の人生を描く。Isabel に自由なのびのびとした人生を送らせるため、病身のイギリス貴族 Ralph Touchett は、彼女に財産を贈る。財産目当てで芸術家まがいの Gilbert Osmond と結婚した彼女は、子供をもうけるが、たったの6カ月で失ってしまう。愛情を感じる義理の娘 Pansy Osmond も、大人が勧める財産目当ての結婚を嫌い、修道院に入ってしまう。Isabel の心の支えであった Ralph の死後、彼女はまた愛の冷えた家庭へひとり戻ることになる。円熟期の作品 *The Wings of the Dove* (1902) では、主人公の

Milly Theale は作品に登場する時点で、既に不治の病に冒されているという設定になっていて、作品の終りを待たずに死ぬ。

「死」の具体的描写については、*Roderic Hudson* の Roderic の場合、F. O. Matthiessen が “his own special gift was the product of his trained eye and of his intensely pictorial imagination”<sup>15)</sup> と言うように、外見的描写は絵画を見るがごとくに鮮明に描かれている。しかし、死にゆく人の苦しみの記述は見あたらない。*The Portrait of a Lady* の Isabel Archer の子供に至っては、懐妊や誕生の喜びの記述が無いのみならず、死の扱いがたったの1行ですまされ、女の最大の出来事であるわが子の存在の有無が言葉遊びに終わっている。現実の出来事としては伝わらず、あたかも肉体をどこかに置き忘れてきたかのような錯覚にとらわれてしまう。晩年の *The Wings of the Dove* の Milly Theale の死は、心の恋人 Densher の想像の世界を通して表現される。Milly の病がひどくなり、起き上がれないようになってからは、Densher は彼女には会っていない。すなわち、死にゆくヒロインの具体的描写はどこにも見あたらない。このように、*Roderic Hudson* と *The Wings of the Dove* は主人公の死によって作品は終り、*The Portrait of a Lady* は主人公ではないが、彼女の大切な子供の死が含まれていて、「死」の描写の特徴は長編においても短編と大差なく扱われていると考えられるのだ。

中編の作品で代表的なものは、*Daisy Miller* (1879) と *The Turn of the Screw* (1898) だろう。前者の Daisy は、教養を身につけるために滞在しているローマで熱病に罹って死ぬ。後者では、ロンドン郊外の田舎の古城における家庭教師と二人の子供、Miles と Flora、という設定で、最後は Miles の死で終る。Daisy については死の具体的な描写は無く、母親の言葉からそれしか分かるだけだ。Miles の死に至っては、彼を守るために強く抱きしめた家庭教師が、はじめて気が付くという、その死は余りにもあっけない。

こうして見てくると、James の作品は短編のみならず、長編、中編においても「死」の取り扱い是不変ならない。短編に共通する特徴は James の全小説に共通していると言うことができる。すなわち、第一に、死の具体的描写が見られないこと。第二に、死は醜いものではなく、美しい、救いの道であること。第三に、死は物事の最後ではなく、残る人々に悲しみのみならず、なんらかの精神的遺産を残すものだということである。

さらに、作品の結末に見る James のメッセージは、この三点を包含するもので、人生においては幸せな結末は存在しない、人生とは孤独と哀しみと諦めのうちに過ぎていくものだという意識に他ならない。その点について Graham Greene は “There is no possibility of a happy ending; this is surely what James always tells us, not with the despairing larger-than-life gesture of a romantic novelist but with a kind of bitter precision.”<sup>16)</sup> と言うが、確かに James の作品全体に漂う雰囲気は、静かで孤独で哀しく諦めに満ちたものである。

## II

ではこうした登場人物達の「死」の描写に共通する三点は何を意味するのであろうか。第一の、具体的描写が無いことについては、James の興味の対象を考えれば容易に推測がつくだろう。James は人間の行為には関心が無かったのだと考えるのは Spender である<sup>17)</sup>。さらに、James は行為を伴わない人生の想念に関心を寄せていたのだと言う<sup>18)</sup>。すなわち、James は動的な外的、具体的事項より、静的な内的、心理的側面に心が向いていた。実生活においても、“In conversation he liked, of course, mostly to discuss psychological subjects.”<sup>19)</sup> と Spender はその傾向を示している。James 自身も “There are few things more exciting to me, in short, than a psychological reason”<sup>20)</sup> と語っているのだ。彼は肉体的苦痛より精神的苦痛に関心

があり、死際の具体的な苦しみを描こうとはしないのである。

第二の、死は醜いものではなく、美しい、救いの道であるということについて考えてみよう。James の作品では「死」を具体的に描写せず、したがって死の醜さや断末魔の苦闘は取り除かれている。さらに、彼の従妹の Minny Temple の死によって、James は「死」を美化するようになる。彼女は 24 歳という人生の最も華やかな時に、期せずして死を迎える。旅先で彼女の死を知った James は衝撃を受け、彼女の思い出は、生涯彼の脳裏を離れなかった。James の人生において Minny 以外、精神的に大きな影響を与えた女性はいない。彼女の思い出は、歳を重ねるにつれて美しく膨らみ、さらに、人一倍繊細な美意識を持っていた James は、病死によって若い女性の美を永久に保てる、美に永久に命を与えることができると考えた。加うるに、女性の最も美しい時期の死に対する憧れが彼に生じたとしてもおかしくはない。もしそれ以上従妹が長らえたとしても、果して彼女の幸せにつながったかどうかは James 自身も疑問視している。死は Minny にとっては、これ以上の苦しみからの逃避であり、彼女の魂にとっても救いであったと James が考えていることは興味深い。そして、死によって彼女の魂に平安がもたらされたであろうことを James は喜ぶ。それは母親への手紙でも明らかだ。

I could shed tears of joy far more copious than any tears of sorrow when I think of her feverish earthly lot exchanged for this serene promotion into pure fellowship without memories, thoughts and fancies.<sup>21)</sup>

この意識が作品に反映し、醜い死の描写はなく、死は美しい救いの道になっていくのだと思う。

第三の、死は物事の最後ではなく、生き残った人々に悲しみのみならず、なんらかの精神的遺産を残すということについて考えてみたい。“*Passionate Pilgrim*” では、Clement Seale の死が、語り手と Seale 嬢に豊かな思い

出を残す。特に後者に対しての精神的遺産は大きなもので、彼女の単調で消極的な人生においては貴重な意味を持つものとなるであろうことが想像される。“The Author of the *Beltraffio*” では、精神的遺産というより、美を永久に保つための死という意味合いが強いものの、語り手である青年の忘れ得ぬ痛恨の思い出となった。“Brooksmith” の Mr. Offord と Brooksmith の死は、二人によって維持されてきた純粋な伝統的英国サロンの消滅を意味する。サロンに集った多くの人々に文化的遺産の何たるか、それを継続維持できる真の英国紳士の少なさを考えさせ、懐かしませる貴重な材料になる。“The Beast in the Jungle” の May Bartram の死は、John Marcher の存在の意味、及びその空しさを教えた。彼にとっては、彼女の死が結局は自分の死でもあった。“The Bench of Desolation” の Herbert Dodd の妻と二人の子供の死は、Kate Cookham と新しい生活に入ったとしても、Dodd の足かせとして彼の頭から離れることはないであろう。しかし、精神的遺産の最たる例は *The Wings of the Dove* の Milly Theale だ。彼女は Densher に莫大な財産を遺して死ぬが、彼はそれを受け取することを拒否する。さらに、Kate と Densher の関係も Milly の死によって変わることになる。Milly の死の波及効果は大きく、周りの人々に美しい思い出を残すに止まらず、残された二人の関係も、さらには、その二人の人生観をも変えてしまう。金銭的遺産と精神的遺産の二つが揃うことによって、その相乗作用が効を奏し、崇高な精神的遺産の凝縮がこの作品で示される。

### III

では、なぜ James は死をただそれだけに終らせないのだろうか。特定の宗派に属することのなかった彼は、宗教的戒律によって生きることはなかった。知的な面での人間の存在価値を尊び、誠実さや忠誠心といったものを大切にした James は、誰にも理解できる古風な道徳に人間の規範を置く

た。それは芸術作品においても然りで、C. B. Cox は “moral evaluation was for James the whole purpose of art”<sup>22)</sup> と述べて James における道徳の意味するものを解説している。“Civilization, tradition, high intelligence, tact, understanding, the ability to love and to suffer, are the chief moral values which one finds in James’s work.”<sup>23)</sup> と Spender も言うように、James の作品の特徴は道徳性に凝縮される。しかし、James が生きた 19 世紀は、特にアメリカ社会は、急速に産業社会へと変化し、古い伝統的価値観が意味をなさなくなっていた時代であった。そのような時代に生きた James は、ヨーロッパから受け継いだ古き良き価値観を捨てきれず、それに裏打ちされた道徳意識を主張し続ける。そして、人間の死に際して、残された人々は、死者の道徳観を精神的遺産として引き継ぐことによって、人間本来の生を全うすることができるのだと James は考えた。それはとりもなおさず個人の無限性、ひいては、人間の普遍性を説くことになる。個人の無限性を信じた先達 Ralph Waldo Emerson (1803-82) と同様に、James も、それを信じていたのだ。Spender は文学作品の道徳的価値を尊重し、“the greatest art is moral even when the artist has no particular moral axe to grind”<sup>24)</sup> と主張して、James 作品の意義を高く評価する。

しかし、これは 73 歳になった James の、自分自身への孤独な語りかけであったのかもしれない。Minnie Temple を失った時、彼は母親に “But how much—how long—we have got to live without her!”<sup>25)</sup> と言って、悲しみと共に、生を与えられた人間は、その生を全うしなければならないことを強く認識した発言をしている。さらに、Grace Norton への励ましの手紙でも与えられた生を放棄することは誤りであると語っている。

I don’t know why we live—the gift of life comes to us from I don’t know what source or for what purpose; but I believe we can go on living for the reason that (always of course up to a certain point) life is the most valuable thing

we know anything about, and it is therefore presumptively a great mistake to surrender it while there is any yet left in the cup.<sup>26)</sup>

このように、James が、生を与えられた人間は生きることが義務であるということを繰り返す背後には、彼の生きることへの自信のなさが隠されていた。James の作品には死の場面が多く描かれるが、死は全ての終りではなしに、残された人々に精神的遺産を残す。これは、とりもなおさず、生きる意味を読者に伝えようとしていることに他ならない。そこに辿りつくまでの James の心理を探ってみると、彼の「死への憧れ」が底流にあるように思われる。この点について次章で具体的に検討してみよう。

#### IV

Henry James の「生への要求」と「死への憧れ」のジレンマを解明するために、もう一度作品にもどって、登場人物達が仮に死を免れた場合を考えてみよう。“Passionate Pilgrim” の Clement Searle は、生きようとする意志を持っていたら、英国の伝統を自分の手にできた。しかし、彼は生きる意志を無くす。何故 Searle は死の世界に追いやられるのか。それは、死は生きることよりましなこと、死は救いの道だという思いが James にあるからだと考えられはしないか。“The Author of *Beltraffio*” では、Mark の家族三人は皆、死の世界の住人になる。もしこの家族が生き長らえたら、当然夫婦間の壮絶な闘いが繰り返されたことだろう。James はそれを避けた。それは、人を醜く苦痛の多いこの世に置くより、憧れの、安楽に過ごせる死の世界に送り込むためであろう。これもまた James の持つ死の世界を肯定する気持ちの強い表れと思われる。James の死の世界への憧憬が色濃く出ている作品だ。“The Beast in the Jungle” の May Bartram は、たとえ生きていたとしても John Marcher の愛を得ることはできない。受け入れられない愛に苦しむより、死ぬことによる救いを James は選んだ。“The Bench of

Desolation”はJamesの60代後半の作品であり、追いつけてきた死への憧れも、憧れとして自分の心の奥深くにしまいこむことを覚え、現状を受け入れる諦観に達したのではなかろうか。中途半端な結末に彼の死への憧れの行き着くところを見るような気がする。

作品に隠されたJamesの「死への憧れ」に関わって、ここで興味を引くのはF. O. Matthiessenの次の言葉である。

At the ambivalent pole of his insecurity was a revulsion from life, no less profound for being decorously hidden from public view.<sup>27)</sup>

Jamesは「生に対する深刻な嫌悪感」を持っていたとあるが、その理由は彼の手紙に記されている。それは1880年代の終りごろHowellsに宛てたもので、そこには次のようにある。

I can't talk of death without seeming to say too much—I think so kindly of it as compared with life—the only thing one can compare it to.<sup>28)</sup>

Jamesにとって「死」は忌み嫌うべきものではなく、心の中に常に存在する安らぎであった。ではどうして彼は「死」を自分の親しい、心許せる友人のように扱っていったのであろうか。この手紙の文章から考えると老齢の人の言葉のように思われがちだが、James 30代の頃のものなのだ。そして、もうその頃には彼自身の結婚観も固まり、独身を貫く心構えも出来ていたようだ。結婚に関してはGrace Norton宛の手紙で次のように言っている。

I am unlikely ever to marry . . . One's attitude toward marriage is a fact—the most characteristic part doubtless of one's general attitude toward life . . . If I were to marry I should be guilty in my own eyes of inconsistency—I should pretend to think quite a little better of life than I really do.<sup>29)</sup>

このようにJamesは結婚を積極的に肯定しているわけではない。さらに、結婚に対する夢も持っていない。この時点で既に、独身を通す心構えは固

まっていたのだろう。正直な James は、この気持ちを作品に投影し、Edmund Wilson が “the men are always deciding not to marry the women in Henry James”<sup>30)</sup> と言うように、結婚に踏み切れない男性を多数創り出している。この点について Robert Ernest Spiller も “At the age of thirty he was committed to the role of cosmopolitan, having virtually no home of his own, a wanderer mainly in Europe.”<sup>31)</sup> と、既に 30 歳で James は、家庭を持たずヨーロッパでコスモポリタンとして生きることを決めていたと言っている。

## V

James は幼少の頃に吃りの傾向があり、それが内向的、消極的性格と相まって「生きることへの自信のなさ」を生み、読書に夢中にさせたとされている。アメリカとヨーロッパの往復を通して、学校教育ではなしに家庭教師によって教育を受け、子供同士の接触が少ない中で成長する。彼の内向的性格に拍車をかけたのが、18歳の時の事故であった。近所の火事の消火を手伝って負った背中への傷が、後々まで彼の肉体を苦しめることになっただけでなく、精神的消極性を助長し、人生の荒波に飛び込むことへの恐怖を煽ることになる。そして彼は、傍観者という姿勢に自分の存在意義を見つける。すなわち、行動は決してしないが、好奇心という知的参加の手段によって、人生経験を我が物にすることに価値を見出した。小説においても語り手という、いわゆる傍観者が多く作り出されることになる。“Passionate Pilgrim”, “The Author of *Beltraffio*”, “Brooksmith”, *Roderic Hudson*, *The Wings of the Dove* 等は正にその典型であろう。その点について Wilson は次のように語っている。

... but many of James's inquisitive observers who never take part in the action are presented as superior people, and Henry James had confessed to

being an inquisitive observer himself.<sup>32)</sup>

さらに James は、経験の意味するものを、実体験のみならず精神的に理解できるものにまで拡大解釈して、自分の内的世界を広げる。それは、次の文章に示されている。

Experience is never limited, and it is never complete; it is an immense sensibility, . . . It is the very atmosphere of the mind; and when the mind is imaginative—much more when it happens to be that of a man genius—it takes to itself the faintest hints of life, it converts the very pulses of the air into revelations.<sup>33)</sup>

経験は想像力によって補えるものだと James は考えた。そして、小説を外面的出来事を超える心のドラマへと深めていく。Spiller は “By making the conscious self of the artist, as discovered through his own sensibilities, the final measure of experience Henry James shifted the grounds of realistic art from the outer to the inner world.”<sup>34)</sup> と内的世界への移行を語っている。さらに James の傍観者としての観察眼は、絵画における造詣を深めたに止まらず、人間心理、及び人間の真実を見抜く確かな目を養っていった。Spiller は、James は限られた経験から普遍的真理を創り出すと続けて語っている<sup>35)</sup>。その点について Spender も “The life that James is on the surface, describing, maybe false; the life that he is all the time inventing is true.”<sup>36)</sup> と表面的には確かとは言い切れない描出があったとしても、彼は人生の真実を常に語っているのだと言う。

Henry James の人生に影響を与えたもう一つの忘れてはならない出来事は、従妹の Minny Temple の死である。James 26 歳の時の出来事で、心に深い痛手を負う。彼女の死は、彼の人生において重要であるだけに止まらず、彼の文学生活においても大きな意味を持っている。その点について Spiller は、 “with the death Mary [sic] Temple became the most important

inspiration and model for his fiction, the prototype of the young girl who asked all of life and was deprived of even a moderate share.”<sup>37)</sup>と言う。生涯を通じ James に精神的に深く関わった女性は Minny をおいて他にない。

Minny Temple の死により、James は生の不確かさ、美しい者のはかなさ、幸せを信じることへの疑念、生きることの過酷さを味わう。そして、死によって美しい思い出が損なわれないことに安堵する。この意識が彼の心に大きくのしかかり、美し過ぎる者は長くはこの世に生き続けることはできないという図式が次第に定着していくことになる。それが “The Author of *Beltraffio*” の息子であり、*Daisy Miller* の Daisy であり、*The Wings of the Dove* の Milly Theale なのだ。こうして生涯、彼は Minny Temple をモデルにして様々な女性を描き続ける。彼女の死が、彼の「死への憧れ」を培ったのかもしれない。それについて Greene は次のように語っている。

... when we remember how patiently and faithfully through out his life he drew the portrait of one young woman who died, one wonders whether it was just simply a death that opened his eyes to the inherent disappointment of existence, the betrayal of hope.<sup>38)</sup>

希望は裏切られるものだという意識は、人生には幸福な結末はないのだという意識と共に James に深く染み込むが、表面に浮上することはない。

以上見てきたように、Henry James の「死」の描写には、三つの共通点がある。死の具体的描写が無いこと、死は苦しく醜いものではなく、美しく、救いの道であること、死は物事の最後ではなく、生き残りの人に精神的遺産を残すものだ、という三点である。全ての作品の底辺にある人生には幸せな結末は無いという意識が、「生きることへの自信のなさ」、「生に対する深刻な嫌悪感」、「死への憧れ」、という流れを生む。そして、その意識は、James の環境、生い立ち、性格から生じたものに他ならない。また、彼の生来の性格、豊かな知性に裏打ちされた豊富な芸術的知識と素晴らしい審美眼、それ

に、経済的な豊かさは、人間を理想視しすぎる傾向を James に与えた。それに加えて、18歳の時に負った傷の後遺症と、26歳の時に遭遇した最愛の従妹 Minny Temple の死によって、人生の泥沼に己を投げ出すことのできない消極的な人生を選択することが、James の常となる。飽くなき文学研究とは逆に James は、実人生における体験については非常に消極的であった。Spender は、“He was a man whose life was withdrawn far into himself, although he was capable of passionate disquisitions on his art.”<sup>39)</sup> と言う。James の芸術に対する執念は強く、文学研究の交友は想像以上に多かった。残されているおびただしい彼の手紙によると、当時の多くの著名な芸術家達との交際に驚くほどである。しかし、実生活の経験の方は必ずしも絢爛とは言えず、知的激しさと実生活の静けさとの対比には眼を疑わせるものがある。

当時としては長寿の Henry James は、表面的には見事に隠されてはいるものの、生きることと同等か、あるいは、それ以上に「死への憧れ」を持ち続け、次第に諦めの中に矛盾に満ちた人間の存在を認めるようになる。その諦観が“The Bench of Desolation”の Herbert Dodd となっていった。

「死への憧れ」を抱きつつ、生を与えられた以上、生き続けなければならぬという死生観に裏打ちされた彼の作品は、James 特有の世界を生み出し、永久に生きることに、読者に問い続けるのだ。一般に文学が栄えるのは不幸な時代であり、幸福な生涯を送った人は偉大な文学者にはなれないと言われている。Henry James の作品の普遍性と、彼の生涯拭いきれなかった「死への憧れ」——彼の精神的不幸——は表裏一体のものであり、彼の生涯に思いを馳せると、表面には表れない苦悩の人生に感慨を覚える。

〔注〕

- 1) Stephen Spender, *The Destructive Element: A Study of Modern Writers and Beliefs*, London, Jonathan Cape, 1935, p.37.
- 2) *Ibid.*, p.40.

Spender の指摘する第二の点の、James 作品の背景になっている死のテーマは、

アメリカ文学の重要な特徴の一つであり、肉体的欲求を極力押し殺すニューイングランドの厳しい清教徒的人生観に端を発している。それは善良な人物は犠牲者になりやすかったり、病による自然崩壊の運命を課される場合が多いということであり、James にもこの傾向が多分にあると思う。

- 3) Henry James, *The Novels and Tales of Henry James*, New York Edition vol. xiii, 1908, rpt. New York, A. M. Kelly, 1970, p. 353.
- 4) *Ibid.*, p. 434.
- 5) Henry James, *The Novels and Tales of Henry James*, New York Edition vol. xvi, 1909, rpt. New York, A. M. Kelly, 1970, p. 47.
- 6) *Ibid.*, p. 71.
- 7) *Ibid.*, p. 12.
- 8) *Ibid.*, p. 73.
- 9) *Ibid.*, p. 67.
- 10) Henry James, *The Novels and Tales of Henry James*, New York Edition vol. xv, 1909, rpt. New York, A. M. Kelly, 1971, p. 361.
- 11) *Ibid.*, p. 372.
- 12) Morton Dauwen Zabel ed., *Henry James*, New York, The Viking Press, 1951, p. 315.
- 13) *Ibid.*, p. 325.
- 14) Henry James, *Henry James's Selected Stories*, ed. Gerard Hopkins, 1957, rpt. London, Oxford Univ. Press, 1967, p. 342.
- 15) F. O. Matthiessen, *Henry James: The Major Phase*, New York, Oxford Univ. Press, 1963, p. 60.
- 16) Graham Greene, *Collected Essays*, London, The Bodley Head, 1969, p. 58.
- 17) Spender, *op. cit.*, p. 29.
- 18) *Ibid.*, p. 28.
- 19) *Ibid.*, p. 64.
- 20) Henry James, *The Art of Criticism*, ed. William Veeder and Susan M. Griffin, Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1986, p. 179.
- 21) Leon Edel ed., *Henry James Letters*, vol. I, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1974, p. 226.
- 22) C. B. Cox, *The Free Spirit*, Westport, Greenwood Press, 1980, p. 67.
- 23) Spender, *op. cit.*, p. 63.
- 24) *Ibid.*, p. 19.
- 25) Edel, *op. cit.*, p. 222.

- 26) Leon Edel ed., *Henry James Letters*, vol.II, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1975, p.424.
- 27) Matthiessen, *op.cit.*, p.50.
- 28) *Ibid.*, p.50.
- 29) Edel, *op.cit.*, *Henry James Letters*, vol.II, p.314.
- 30) Edmund Wilson, *The Triple Thinkers*, New York, Octagon Books, 1977, p.97.
- 31) Robert Ernest Spiller, *The Cycle of American Literature: An Essay in Historical Criticism*, New York, Macmillan Publ., 1955, p.130.
- 32) Wilson, *op.cit.*, p.100.
- 33) James, *The Art of Criticism*, p.172.
- 34) Spiller, *op.cit.*, p.129.
- 35) *Ibid.*, p.124.
- 36) Spender, *op.cit.*, p.12.
- 37) Spiller, *op.cit.*, p.130.
- 38) Greene, *op.cit.*, p.60.
- 39) Spender, *op.cit.*, p.12.